



私は始めてトルコの映画を見たのではないだろうか。友人がこの映画を見て、トルコのカパドキアを観光した時の光景を思い出した、会話はドストエフスキーの世界のようだと言ってくれたので、ぜひ見たいと思った。原題は「冬眠」というそうだが、「雪の轍」という和題は、日本的な感傷とロマンを感じさせられる。

渋谷の小さなホールで上映されていた。上映時間が長く、テーマは人間の愛憎で深刻、舞台は始めて目にするトルコのアナトリア地方の山地の小さいホテルと大自然。トルコ人の文化的背景はイスラムであるが、非常に西欧化している。興味深い作品だった。

主人公はイスタンブールで俳優をしていたが、父亡き後、地元に戻り、父が経営していたホテル業、地主業を引き継ぎ、自分自身はトルコ演劇史を編纂しようと、書斎でパソコンの前で雑文を書き始めている初老の男性

である。若く美しい妻がいる。また、離婚して実家に帰っている妹がいる。この三人は使用人を使い、西欧文化を味わいインテリとして生活をしている。主人公は物書き、妻は慈善家、妹は鋭い視線で、辛辣な批評が出来るほどだ。ところが女たちは経済力のある男によって生活が保証されて、怠惰に、勝手に暮らしているだけで、自らの力では居場所を持ってないことが分かってくる。

冒頭、主人公の車の窓ガラスが一人の少年の投石によって割られたことから、この物語が始まる。少年を追って行くと、彼は主人公の家作に住んでいて、家賃滞納のため、様々な生活物資を取り上げられ、極貧の様子が明らかであった。少年は家賃を払えない父が侮辱され、住む家を失う不安で、怒り、主人公の車に投石してしまった。少年には優しい恭順なイスラム導師の叔父がいて執成してくれた。主人公は使用人に家賃の取り立てをさせているので、直接的に店子と関わることがなかったし、使用人は忠実に職務を行うことによって自分の賃金を得ているわけで、呵責なく仕事をただけである。しかし、ここにも安心して居場所を持ちえない貧しい民衆がいることを知らされる。

主人公家族は皆、自己正当化し、対立し、孤独である。主人公は妻を支配し過ぎ、傷つけ、失うかもしれないという不安で、妻の慈善に協力するといって大金を渡し、家をしばらく離れようとする。慈善家の妻は謝罪に来た投石少年の痛々しい姿に同情し、大金をそっくり少年の家族に持っていった。少年の父は、その金額を、家賃滞納のために受けた侮辱の賠償、少年が父の誇りを傷つけられたために苦しんだ賠償、家財を取り上げられた不自由の賠償として適当だと言った後、その札束を暖炉に放り込んだ。同情への拒否であった。慈善家の妻は驚いて、自分の行為の意味を自問自答する。

この場面を見て、私は前日パルミラの遺跡がISによって爆破されたニュースを思い出した。貴重な遺跡が失われた。しかし、存在を軽く扱われ、居場所を奪われ、人間の誇りを奪われたイスラムの人間の代償として、なにを差し出したらいいのだろうか。イスラムの苦しみにどう向き合ったらいいのだろうか。

主人公は旅をして、自由に走る美しい野生の馬を捕獲した自分、小さい野兎を猟銃で撃った自分を振り返り、息も絶え絶えに暮らしているような妻を愛していることに気づき、失いたくないと、急いで帰宅する。厳しい冬の大自然を背景に、構造的な貧困、差別の中で生きる弱い存在への思いが溢れている映画だった。



パルミラ神殿破壊IS公開 2015. 8. 26 AFP